

リモートな現地調査

小山 祐実*

国内調査ならできる？

2021年1月7日、宮崎県独自の「緊急事態宣言」が発動した。2日前に宮崎市入りしていた私は滞在先でこのニュースを知った。早速、調査地である宮崎県串間市に住む知り合いのSさんに電話をした。数年前、釣り人の紹介で知り合い、昨年11月に串間市の自宅へ訪問させてもらった方だ。彼は紆余曲折あって宮崎の山奥でドッグシャンプーを製造している。「いやあ、状況が悪い」少し口ごもってから続けた。「移動したほうがいいよ…荷物まとめて京都に。」

私は人口800人余りの串間市市木地区(旧市木村)で狩猟者とイノシシ狩りの調査をするために42日間の計画を立てていた。Sさんは、東京から奥さんの実家のある市木に移り住み、自営業の傍ら、半ば家業であるイノシシ猟をしている。

「確かに現在の状況は深刻だと思いますが、隔離期間を設け、高齢者の方とは接触しません。万全の対策をします。何か他の調査方法があるはずですよ。どうか行かせてください。」

ここで引き下がるなんて論外だと私は思った。とは言ったものの、調査対象は8割近くが高齢者であった。翌朝、登山リュックを担ぎ、スーツケースを引きずりながら、電車に乗って目的地へ乗り込む。こうしてはじめてのフィールドワークが辛うじて始まったのだった。

孤独なフィールド

市木にはサル芋の芋洗いでも有名な幸島があり、満天の星空と亜熱帯植物に囲まれ、波の音が聞こえてくる。そんな海岸近くにある京都大学野生生物研究センター(WRC)の施設で、私はひとり途方に暮れていた。誰もいない砂浜やあぜ道でジョギングをしているところを目撃されると、よそ者である私の話があっという間に村中へ広まってしまう。京大への不信感や県外者に拒否感をもっていそうな人、都会や若者に好奇心をしめす人、あるいは噂好きのマダムたち。日を追うごとに、周りの目がより一層強くなる感じがした。

広大なこの過疎地域でこれほど身動きが取

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 平成30年度814人『令和元年串間市統計書』。

れないとは考えもしなかった。常に注がれる視線、誰にも会えない現地調査。はじめは長いと思った隔離期間は刻々と過ぎていく。こうなれば、いっそ目立ってしまおう。2週間後、釣り人を装い、地元の人たちが集まる海辺の茶店に通うことにした。

Sさんの語り

「うちの地元じゃ、『なんだバカ野郎』が挨拶なんだよ」と東京足立区は千住の下町で育ったSさんは言う。「俺は鉄砲が嫌いだけどね。ここに来たとき、市木のおじいちゃんたちに何やってるのか聞いたらみんな猟をしてるって言うから、それをやればいいと思った。」「カモ撃ちとイノシシ猟やってる人は結局、全部獲りたい人なんだ。」「よそ者が何やってんだって言う奴がいるけど、やり続ければあきらめがつくでしょ。」

10年前、奥さんの実家に移り住んだSさんは、ドッグチャンプーの製造販売をしながら、市木では当たり前に行っているイノシシ猟に参加することを決め、地元になじもうと



写真1 幸島と石波海岸
写真の裏手に茶店がある。

した。はったり上等の世界で生きてきたSさんはこの町ではよく目立つ。しかし、猪肉、養蜂、シャンプーの販売を通じて、保守的であるが自然の中での暮らしのある市木をもっと県外の人知ってもらい盛り上げようと奮闘している。

彼の口から発せられる言葉自体には、ほとんど真意は含まれていない。けれども、その言葉の端々には彼が実現したい強い思いが確かに内包されている。それを汲み取るには常に翻訳作業が必要だった。

言葉が通じて

接触が無理ならば、聞き取り調査はできない。質問紙をつかったアンケート調査に丸ごと変更するしかなかった。こういった調査に不慣れな高齢者については、Sさんが話を聞いて代筆してもらうことになった。数日で14名分のアンケートが返って来た。調査対象者の大半は前年11月の予備調査で会ったことがあったので、その顔を思いうかべながら「〇〇さんは大人しく控えめな人だが、猟をすることで農家さんを助けたいという思いがあったのか」などと感心していた。ところが、Sさんが書いたと思われる用紙を見ると、何かがおかしい。「質問：猟で得た猪肉は誰とどのように分配しますか」「回答：分ける」「質問：今期の猟の成果やイノシシの変化（増減など）について教えてください」「回答：昔のキジ猟」これはまずい。

その他にもアンケート調査の信憑性を疑うような回答が散見された。そういえば、Sさんもそうだったが、この地域で猟の名手と呼

ばれているその義父のIさんの話にしても、数えきれないほど獲ってきたイノシシのこととなると毎回ストーリーが違っていた。まゆつば話が飛び交う中、一番近くで2人のことをよく知るSさんの妻Kさん、つまりIさんの娘にこっそり連絡を取った。

Sさんのように親身に相談にのってくれ、いろいろなことを教えてくれる協力者がいることは、フィールドワークをおこなううえで大きな利点であるが、特定のひとりに依存するのではなく複数の情報提供者がいることが重要だと、このとき実感したのだった。

情報のバランスを取る

まずはKさんに事情を説明し、Kさん自身に夫と父へ同じ項目について聞き取りをしてもらった。また、動物を殺めることに肯定的でない彼女の視点から、狩猟に打ち込む2人の姿や尊敬できる部分について直接語ってもらったり、他の調査対象者に電話などで回答の確認や追加の質問について聞き取りをしてもらった。

また、私自身も地元の豊富な郷土資料を読み漁って聞いた話の裏を取ることにつとめた。土地、歴史、動植物、行政、人、ある地域を知るうえで必要な要素を調べ、外堀を埋めながら、アンケートで得た情報を立体化させる努力をした。さらに、森に入って獣道やイノシシの糞を探し、田んぼを歩いて農家さんに農作物被害の話聞き、茶店に来る人には獣害や動物のことを聞くなど、できるかぎり生の情報を得ようとした。

それでも、想像していたフィールドワーク

には程遠く、なかなか期待した結果は出ない。猟師の多くは高齢者で、車を15分も走らせば会うことができる場所まで来ているのに、何重ものフィルターを通してしかデータが手に入らないのだった。

リモートとローカル

人の発する言葉には勘違いや曖昧な情報が数多く含まれている。したがって、さまざまな側面からデータを精査することにより、その「根拠」を確保しなければならない。たとえ対象者を目の前にしていたとしても、情報がゆがめられてしまうことがある。たとえば、自分が正しいと思う考えを強調しすぎたり、自分のおこなった行為を正当化しようとしたり、恥ずかしいことは望ましいシナリオに書き換えたり。そういった個人の期待、虚勢、秘密などのバイアスによって、無意識のうちに「現実」が創造されることはよくある。

そうはいても、実際のフィールドワークでは、こういった留意点を心に留めながら人々の感情や性格、コミュニティ内での立ち位置、その日のテンションといった非言語情報を探ることにより、ひとつひとつの発言に信憑性を与えて「データ」にすることができる。

ところが今回のようなリモート調査ではどうだろう。たとえばIさんへのアンケートでいえば、依頼したSさんが質問するとき、またIさんが回答するときに情報のゆがみが生じ、さらに質問紙に回答を記入するSさんの視点と解釈が加わっている。私が用意した質問の意図が正しく伝わっているかどうか分

からない。質問と回答にかかわる微妙な非言語情報は私にはまったく分からず、コミュニケーションはすっかり屈折してしまっていた。

もちろん、ローカルな現場で人と会っておこなう調査でも、情報のゆがみは常に生じているにちがいない。今回、リモート調査を強いられたことで、図らずも、その危険性をまざまざと実感することができたことは、はじめてのリモート・フィールドワークの収穫だったといえるかもしれない。

フィールドワークのこれから

1年以上にわたり、連日 COVID-19 の話を耳が痛いほど聞かされているが、まだどこかで「いつか終わる」、「あと少し辛抱したら元に戻る」といった期待を、私を含め多くの人々が抱いているのではないだろうか。そうした期待をもちつつ、当面は日本のフィールドで調査をしようと私は考えていた。しかし、これまで書いてきたように、日本でなら

ばなんとかフィールドワークができる、ということにはなかった。今後も、アフリカやアジアで、今までどおりフィールドワークができる日が戻って来るのだろうか。

コロナ騒動はひとつの転換点として、以前のようにフィールドワークが当たり前に行えるという前提を再考しなければならないのかもしれない。リベラルで一筋縄ではいかない S さん、自信家で豪快な I さん、地域と家族を第一に想う K さん。新しいかたちのフィールドワークがありうるのだとすれば、誰とどのようなコミュニケーションをとることになるのだろう。そのとき、生きた人間、生きた世界をつぶさに観察するという ASAFAS の強みをどうやったら残していけるのだろうか。リモート調査を取り入れることで、そのアドバンテージを保ち続けることができるのだろうか。コロナ禍の中で、フィールドワークの可能性について、個々人がより一層真剣に考えてみる必要があるだろう。